

追悼 鈴木 秀一 先生



(ペコ)

先生は山形県出身、85年余の半分以上は北海道在住、見るからに「学者」でした。

しかし、理論を社会的実践につなげた後半の生き方は、時に啓蒙家であり、長きにわたる民間教育運動のリーダーであり、更に現場で子ども達と交わり続けたという真の教育者でもありました。東大～小樽商大～北大での研究者時代は、大田堯先生との深い縁を土台にしつつ教育学を深め、後半は北海道において【子ども達が主人公＝学びの主体者】、【教育学習権には学び方をも選択し共に創りあげる】自由と協同の学び舎】の理想理念を掲げ、札幌学院大に移りながら実際にそれを夕張・札幌の地で推進するという、書齋・研究室を超越したいわば“社会事業家”の道を約30年間持続しました。このような生き方、姿勢などに共感共鳴する多くの関係者・後世代が道内外に燎原のように広がっています。

北海道自由が丘学園はもとより教育界には稀有な生き方を選ばれた正に「有難い」先生でした。

日常では飾らず、気位を出さず、気難しくなく、先生と呼ばれるよりも（私達は言えないのですが、夕張寄宿時代や日本語授業では）子ども達に「秀さん」と言われ、その応対を愉しみながらどの子にも寄り添える人でした。他方、オフタイムでは根っからの日本酒党、「ビールと焼魚は不味いよ！」といいながら好物の豆腐で歓談です。そこでも磊落なスケールの大きな存在でした。また趣味では相当の俳人と伺っています。若手でも相手の話をじっくり聞きながら「それは面白い、やってみよう。教育実践は記録が大事、その分析から次の課題が見えてくる…」と絶えず未来志向です。翻って高度成長のもと「学力」競争などで学校が荒れた時代、1986年に有志と共に「新しい教育・学校づくり」運動が始まりました。学会や民間団体を含めてほとんどの代表・会長の要職を務められていました。〔注2〕

私は1,980年代後半からの接点で教育学は部外ですが、先生の大学現役時代は教育方法・授業研究分野を中心に、子どもの発達を現場教師と共同研究的に深めるために各地の学校で実践、加えて民主的な教師集団づくりに心を砕き、その具体展開が道民教（北海道民間教育研究団体連絡協議会）の歴史に重なっています。先生の著書には「教育方法の思想と歴史」「教育の過程と方法」（講座日本の教育）「態度評価の学力論、どこが問題か」「陽はまた昇る」などです。特に最後の本は、北海道自由が丘学園の夕張からの6年余りの実践記録を編集執筆されたもので、本文前書きには「単なる実践記録ではなく、日本においては珍しい『実験学校』たろうとして努力してきたスクールの記録」「教育大学釧路校の教育内容方法研究室で研究された授業プランを実践し、検証する場としての役割を果たしてきた」「子どもたちにとって『最前の利益』（子どもの権利条約）になるように考え…」「私たちのスクールの『民主主義が息づいている場にしよう』と考えていろいろの努力を積み重ねて来たのです」と書かれています。2004年の刊行記念会の200名以上の参加者を前にして、終わりのお礼挨拶の際に壇上で思わず絶句されたシーンは今でも忘れられません。〔注3〕

とはいえ、民間団体が教育実践事業を持続するには困難が多々ありました。当時はNPO法もなく経営は自賄いであり、実践を担うスタッフ確保、普及運動、何よりも子ども達との教育活動は待たなしです。実際に多くの市民・中小企業家同友会有志・教育人脈・夕張地域の住民の方々に支えて頂きました。当時、自由が丘が既存の組織/教育団体・組合などと一体になるのではなく独自の新しい形態を踏み出すことに批判もありました。更に、私達は“人間形成的な中等教育（最初は中学から）”を志向したのですが、法人認可前では不登校生徒・中退者が主対象となる中で、「当初と趣旨が違う」「学校が出来ないのならば応援できない…」との声があがり、03年に夕張を引き上げる際は、会員・支援者の皆さんに経過説明と役員責任・今後の札幌展開を説明しました。その時、「鈴木先生を「酷使」しないで…研究オンリーに専念させたらどうか…」という声も挙がりました。先生は苦笑いしながら、「これは自分の選んだ道であり夢・信念を持っているので気にすることは無い、体調コントロールも出来ている」としてその後も一貫したスタイルでした。私見ですが生き方と風貌から「剛毅、大人(タジツ)」の印象を醸し出し、困難にあたってはいつも樂觀・陽動的に発想提案、加えて周囲へのきめ細かい気配りをして頂きました。

個別の思い出は多々ありますが、夕張スクール時代に毎週末帰路の車中ではいつも子ども達の成長発見を話していた事、月寒スクールで日本語授業後に「今日も上手いかなかった、どうしたら子どもの心を捉えられるかね」と自省しつつ問いかけていた事は印象的です。2007年に小樽・共育の森学園民事再生適用で理事長就任時に「単に借金を返すためではなく、地域と結びついた良い教育実践をする事が本当の再建となる。吉野など自由が丘関係者と一緒にやり甲斐のある仕事にしていきたい」と語った事は、時に「経営本位」的な私への一種引継でもあったような気がします。奥さんを始め、ご家族とは夕張寄宿舎立ち上げ期の電気配線工事・雪下ろし・日々の朝食作りなど大変お世話になりました。

鈴木人脈の縁もあり初期発起人であり顧問を勤めて頂いた大久保さん/同友会、山田さん/北大名誉教授、神山さん/循環ネットワークの皆さんも鬼籍に入られました。どれ程大事な人も何時かは別れが来ます。

私達は先達の労苦と指針を受け継いで、その歩みを持続発展させるべく、置かれた役割を果たしていきたいと考えます。最後に、先生起案によるホームページ「呼びかけ文書」を記載して区切りとします。

私たちは、「人間の起こした問題は、人間の力によってしか解決することができない」という考えから、人間の力を生み出す「教育・学校」を創る運動を進め、これまで、夕張や札幌で主に不登校生や中退者を含む多くの児童を対象に民間教育活動を展開してきました。教育・学び舎は、「子ども達が主人公＝学びの主体者」です。私たちの理念は、「人間形成的(全人)教育」を多くの市民との「自由と協同」により実現していこうというもので、それを1998年以来『ヒューマン・トラスト運動』と表現し、持続中です。



注1:「歴史は変わる」について

この言葉から、かつて学生時代に読んだ「人間の歴史」(イル)「鎖につながれた巨人」(レオ・ヒューバーマン)や「歴史における科学」(パナール)「世界の重み」(モルガン)を思い出しました。先生の生き方/越え方を敷衍して言葉を推量すると、「支配者・権力の歴史は永遠不滅ではない、その時代はどんなに困難であろうとも必ず次の萌芽を生み出す」、あるいは「地域地方での地道な民主的取組みはいつの日か大河となっていく」、「次世代を生きる子ども達自身の人間の成長を励ます教育が大道となるはず」、というメッセージに聞こえました。今際にして重たく、かつ歴史の必然性をも感じるような「ことば」です。

注2:北海道自由が丘学園運動の展開

1991年北海道自由が丘学園をつくる会/運動普及、直後教育実践/いきいき教室・フリースクール開始、95年設立委員会/学校法人化推進、97年/夕張市と協定書、98年自由が丘夕張スクール開校と進みました。03年NPO法人、13年認定NPO取得。

注3:『陽はまた昇る』出版記念会のこと

本は夕張時代と月寒1年目の教育実践を先生の総括のもとに各スタッフが原稿分担。その「まえがき」は同封別紙をご覧ください。記念会当日、中小企業家同友会経営者や教育関係者各氏の挨拶に加えてアフリカ太鼓演奏・自由が丘生徒達による出し物(音楽・バンド・小劇)を実施。特に後者の時間が長くなり司会の私は焦りながらも子ども達が最後までやり通す様に励ましながら3時間近くを終え…参加者アンケートに児童文学/加藤多一さんから「柔らかい運営進行で良かった」とコメントを頂きホッとした記憶があります。それは、あたくも鈴木先生という大輪を取り巻く多彩な「人脈」「山野の草花/原石」等のハーモニーがもたらした雰囲気だったのではないかと思います。尚、書籍は自由が丘教育と協同の研究所所蔵。(¥2,000円、会員は半額頒布)



過年:教育大釧路学生と農業実習 in 余市教育福祉村

●【「自由が丘、鈴木さん 教育を語る会」】●

今回、一つの節目にあたり表記名にて関係者の集まりをご案内します。当時のことや近況などフリーに語り合いませんか。*告知:通信+HP、できましたら各位連絡網など
◇日時:4月29日(水)13時半～16時(予定)
◇会場:自由が丘月寒ビル3階、参加費500円/茶菓等
◇概要:1部/主催者から、2部/参加者発言・交流
注:家族の意向等により「偲ぶ会」のように行いません。希望者は事前連絡下さい。メール・FAX等。不明点は個別連絡します。尚、当日不都合な方は5/1or2に別会合設定も検討。